

2026年3月8日 四旬節第3主日礼拝「いのちの水を与える主」

讃美歌 21 404番「あまつましみず」と共に ヨハネ 4章 5—42節 北川逸英師

井戸のほとりで、イエスさまは一人の女性に出会われました。暑い昼のことでした。サマリヤの女性は、水をくみに来ました。ただの水です。毎日の生活のための水です。

けれどイエスさまは、思いがけないことを言われました。

「わたしが与える水を飲む者は、決して渇かない。」

この女性は驚きました。そんな水があるのですか、と。

私たちもまた、日々、水をくみに行っていきます。安心できる言葉を求めて、人からの評価を求めて、成功や安定を求めて。しかしどれだけ手に入れても、また渇きます。それは、わたしたちの魂が、本当の水を求めているからです。

『讃美歌 21』の中に明治時代から歌い継がれる晴らしい讃美歌があります。アメリカの教会学校で歌われていた旋律に、日本人女性が歌詞を付けました。私たちの教会讃美歌には載っていませんが、この讃美歌「あまつましみず」のメロディーは、結婚式でよく歌われる「妹背をちぎる」と同じものです。

「あまつましみず ながれきて あまねく世をぞ うるおせる ながくかわきし わがたましいも くみていのちに かえりけり」

「あまつ」とは、天からの、という意味です。「ましみず」は、まことの清い水です。天からのまことの水。それが、キリストです。

サマリヤの女は、最初はイエスさまをただの旅人だと思っていました。けれど、話しているうちに、自分の心の奥を知られていることに気づきます。そして最後には、村の人々に伝えます。

「この方は、わたしがしたことをすべて言い当てました。」

不思議なことに、彼女は責められたとは言いませんでした。知られたのに、拒まれなかったのです。見抜かれたのに、愛されたのです。

四旬節は、自分の渇きを知る季節です。自分の罪や弱さと向き合う季節です。しかし、それは絶望の季節ではありません。渇きを知るからこそ、水のありがたさが分かるのです。

賛美歌は続きます。

「つきぬめぐみは ころこのうちに いずみとなりて 湧きあふる」

主が与える水は、外から注がれるだけでなく、心の中で泉となります。それは、十字架の愛から流れ出る水です。

イエスさまは、私たちの渇きを担い、十字架で「わたしは渇く」と言われました。私たちが渇かないために、主が渇かれたのです。この方こそ、いのちの水です。

四旬節の歩みの中で、私たちは静かに主の前に立ちます。そして祈ります。

「主よ、わたしにその水をください。」

そのとき、主は言われます。

「わたしが与える水は、あなたの中で泉となる。」

1850年代にアメリカの教会学校で生まれた旋律に、横浜で生きる17歳の日本人女性によって、歌詞が付けられました。それに多くの人々が少しずつ手を加えて、今の形になりました。この美しい歌詞は強引に現代語に翻訳されず、今も文語体で歌い継がれています。水が入れられた器によって形を変えても、水の本質はまったく変わりません。

イエス・キリストの福音も、異なる国に伝わって、違う言葉の聖書になっても、神の愛は変わらずにそこに流れています。みことばを心に受け入れる喜びは、世界中どこに行っても同じです。聖霊のお働きはすべての壁をこえます。

今日も、このいのちの水を受け取りましょう。そして渇く世界の中で、この水に生かされて歩いていきましょう。

アーメン。